

昔むかし、あるところに、たいそうまずしい三人の兄弟が住んでいました。ある日のこと、上の兄さんが、

「世の中に出て、ひと財産作ってこよう」といって、旅に出ました。

どこまでもどこまでも、長いこと歩いていって、ようやく一軒の家にとどり着きました。そこにはばあさんがひとり住んでいました。兄さんが、

「今晚、泊めてもらえませんか」とたのむと、ばあさんは、

「いいとも、お入り」といって、泊めてくれました。

夜中に物音がしたので、兄さんはベッドから起きあがると、かべのすきまからとなりの部屋をのぞいてみました。すると、ばあさんがテーブルに向かって、たくさんのお金を数えていました。兄さんはそうつとベッドにもどり、お金のジャラジャラ鳴る音に耳をすませていました。やがておばあさんのいびきが聞こえてきたので、とび起きてとなりの部屋に行き、お金の入ったふくろをぬすんでにげました。

兄さんが走っていくと、教会堂の前に出ました。すると教会堂が、

「わしをそうじしておくれ」といいました。兄さんは、

「いや、だめだ。そんなひまはない」と答えました。

どんだん走っていくと、畑に出ました。畑が、

「草をとつておくれ」といいました。兄さんは、

「いや、だめだ。そんなひまはない」と答えました。

まもなく、井戸のところに来ました。井戸が、

「わしをきれいにさらっておくれ」といいました。兄さんは、

「いや、だめだ。そんなひまはない」と答えて、どんだん走っていきました。

ばあさんが目を覚ましてみると、お金がなくなっています。きのう泊めてやった若者もないので、すぐにあとを追いかけてきました。教会堂の前を通りかかったので、ばあさんはたずねました。

「長い髪の毛をふって

長い革のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

教会堂は答えました。

「むこうの畑の木の下で、お金を数えているよ」

ばあさんがどんだん走っていくと、畑の前を通りかかったので、たずねました。

「長い髪の毛をふって

長い革のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

畑は答えました。

「むこうの畑の木の下で、お金を数えているよ」

なおもどんどん走っていくと、井戸のところに出ました。

「長い髪の毛をふって

長い革のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

ばあさんがきくと、井戸は答えました。

「むこうの畑の木の下で、お金を数えているよ」

ばあさんが、ようやく畑にたどり着くと、兄さんは木の下でぐうぐうねむっていました。ばあさんは、兄さんの首をちょん切って、お金をもって家に帰りました。

しばらくして、下の兄さんがいました。

「世の中に出て、ひと財産作ってこよう」

下の兄さんは、長いこと歩いて行って、ようやく一軒の家にとどり着きました。そこにはばあさんがひとり住んでいました。兄さんが、

「今晚、泊めてもらえませんか」とたのむと、ばあさんは、

「いいとも、お入り」といって、泊めてくれました。

夜中に物音がしたので、兄さんはベッドから起きあがると、かべのすきまからとなりの部屋をのぞいてみました。すると、ばあさんがテーブルにむかって、たくさんのお金を数えていました。兄さんはそうとベッドにもどり、お金のジャラジャラ鳴る音に耳をすませていました。やがて、ばあさんのいびきが聞こえてきたので、とび起きてとなりの部屋に行き、お金の入ったふくろをぬすんでにげました。

兄さんが走っていくと、教会堂の前に出ました。すると教会堂が、

「わしをそうじしておくれ」といいました。兄さんは、

「いや、だめだ。そんなひまはない」と答えました。

どんどん走っていくと、畑に出ました。畑が、

「草をとっておくれ」といいました。兄さんは、

「いや、だめだ。そんなひまはない」と答えました。

まもなく、井戸のところに来ました。井戸が、

「わしをきれいにさらしておくれ」といいました。兄さんは、

「いや、だめだ。そんなひまはない」と答えて、どんどん走っていきました。

ばあさんが目を覚ましてみると、お金がなくなっています。きのう泊めてやった若者もないので、すぐにあとを追いかけてきました。教会堂の前を通りかかったので、ばあさんはたずねました。

「長い髪の毛をふって

長い革のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

教会堂は答えました。

「むこうの畑の木の下で、お金を数えているよ」

ばあさんがどんどん走っていくと、畑の前を通りかかったので、たずねました。

「長い髪の毛をふって

長い革のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

畑は答えました。

「むこうの畑の木の下で、お金を数えているよ」

なおもどんどん走っていくと、井戸のところに出ました。

「長い髪の毛をふって

長い革のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

ばあさんがきくと、井戸は答えました。

「むこうの畑の木の下で、お金を数えているよ」

ばあさんが、ようやく畑にたどり着くと、下の兄さんは木の下でぐうぐうねむっていました。ばあさんは、下の兄さんの首をちよん切って、お金を持って家に帰りました。

しばらくして、弟がいました。

「世の中に出て、ひと財産作ってこよう」

弟は長いこと歩いて行って、ようやく一軒の家にとどり着きました。そこにはばあさんがひとり住んでいました。弟が、

「今晚、泊めてもらえませんか」とたのむと、ばあさんは、

「いいとも、お入り」といって、泊めてくれました。

夜中に物音がしたので、弟はベッドから起きあがると、かべのすきまからとなりの部屋をのぞいてみました。すると、ばあさんがテーブルにむかって、たくさんのお金を数えています。弟はそうつとベッドにもどり、お金のジャラジャラ鳴る音に耳をすませています。やがて、ばあさんのいびきが聞こえてきたので、とび起きてとなりの部屋に行き、お金の入ったふくろをぬすんにげだしました。

弟が走っていくと、教会堂の前に出ました。すると教会堂が、

「わしをそうじしておくれ」といいました。弟は立ちどまって、大きな教会堂の中をていねいにそうじして、また走っていききました。

どンドン走っていくと、畑に出ました。畑が、「草をとっておくれ」といいました。弟は立ちどまって、広い畑の草をすっかりとってやりました。

まもなく、井戸のところに来ました。井戸が、「わしをきれいにさらっておくれ」といいました。弟は立ちどまって、井戸をきれいにさらってやりました。

ばあさんが目を覚ましてみると、お金がなくなっています。きのう泊めてやった若者もないので、すぐにあとを追いかけてきました。教会堂の前を通りかかったので、ばあさんはたずねました。

「長い髪の毛をふって

長い草のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

教会堂は返事もしないで、ばあさんに石を投げつけました。ばあさんは、にげだしました。

ばあさんがどンドン走っていくと、畑の前を通りかかったので、たずねました。

「長い髪の毛をふって

長い草のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

畑は返事もしないで、もうもうと土煙をあげ、ばあさんに石を投げつけました。ばあさんは、にげるのがやつとでした。

どンドン走っていくと、井戸のところに出ました。

「長い髪の毛をふって

長い草のふくろを持った

若者を見かけなかったかい

私のあり金

そっくりぬすんだ若者を」

井戸はそれを聞くと、水がどンドン増えてあふれはじめました。しまいにばあさんはおぼれて死んでしまいました。

弟は、お金を持って家に帰り、幸せにくらしたということです。

村上郁再話